

「もとはこちら」のお話し

№25 今月のテーマ

大悟に通じる 真の無知



講義中の平井先生



平井謙次著 「ん」

新年 あけましておめでとうございます

北原ゆり筆

平井先生が旅立たれてから、早くも三年の月日が経ちました。先生がご生前書きためられていた未発表の原稿に、幾つかの講義録を加えた著書、「ん」の上下刊が、お陰様をもちまして、今春発刊される運びとなりました。刊行に際しましては、皆様には、表に裏にとあらゆる方面に亘っての支援をいただき、誠に有り難うございました。ここに改めて心よりのお礼を申し上げます。

最後のご本

さて、この本に収められている平井先生最晩年の原稿は、誠に意義深いものであり、また新たな教材として、多くの事を私達に気付かせて下さる事と思います。

収録されております講義録につきましては、直々に講義を受けられた方々にとっては、誠に懐かしいものであり、当時の先生のお顔の表情や手のしぐさ、そしてその時々のお息遣いまでも、色鮮やかに思い起こされる方も多いのではないかと思います。

さて、この本の最初に出てくるお話は、「せっぱ詰まった時」というタイトルの付けさせて頂きました、1991年夏の講義録です。

電車に乗ったものの、急にお腹が痛くなり、トイレに行きたい。しかし電車の中にトイレはない。走っている電車から飛び降りることもできず、どうする事もできない。お腹はいよいよ痛みを増してくる。さあ、どうするか! という、本当にせっぱ詰まった、難儀なお話です。

当時平井先生は、半分笑いながら、半分は真剣に、「これで本当に悟れますよ」と言われ、そして、「来週までに、自分ならどうするかという事を考えてきて下さい。これ、宿題」と言われました。

さてその翌週、一人ひとりの答えを聞き終わった後、
「みんな、頭で考えているんだよね」と言われた辺りの事は、この本に出てくる通りです。話の続きは、どうぞ「ん」のご本をお読み頂ければと思います。

あれから一七年以上も経ったわけですが、今再び、もしも先生から同じ質問を受けたとしたら、さて私達は何と応えることでしょう。

今回初めて、この「ん」という本を手にした方も、そしてまた当時勉強会に出席しておられ、実際に先生と直接問答なさった方も、ここで改めてもう一度、真剣に考えてみて頂きたいと思います。

考えてみるに当たって、先生ならば、きっと次のように仰る事だろうと思います。「頭で考えるんじゃないよ。」

これは足の裏で考えてみて下さい」。それから多分、「考える、というよりは、工夫する、と言ったほうが良いかな」とも。

同じ事を 聞き続ける力

ところで長く平井先生のお話を聞いてこられたある方が、「先生に言われたその言葉の意味が、どうしてもその時は分からなかったのですが、あれから何年も経って、ようやく、今、そのことばの意味が分かりました」と、喜んでお電話を下さった事がありました。

誠に結構なことで、その電話の向こうの声も明るく弾んでいて、とても楽しそうに笑っていました。長い間心の中



で温めてきたそのモヤモヤとした疑問が、何かの拍子にさつと解けて、身も心も本当にすっきりとしたという感じでした。

~~~~~

「同じ話を、百回聞くだけの力を持つ」と、先生はいつも言われておりました。

例えば、大阪の天王寺に大融寺というお寺があります。その麻生老師はどんな時でも、またどんな場所でも、無財の七施（むぎいの ななせ）というお話しかなさらなかったそうです。それで、「そんな話は、もう聞き飽きた」と言って、来なくなる人が結構いたそうですが、「そういう事では駄目だ」といつも先生は言われていたのです。

麻生老師の無財の七施のお話のみならず、平井先生の「もとはこちら」という事についても、全く同じことが言えると思います。

もとはこちらという事を、耳にたこが出来るほど聞かされ、言葉としてどれ程それを知ったとしても、それだけで「もとはこちらの全てが分かった」、等と早合点してはならないという事です。

もっとも、まだまだ、の気持ちで何回も何十回も聞き、そしてその聞いた事を訊きっぱなしにして終わるのではなく、自分でも実行実践して、その本意が心底分るまで、そして身に付くまでやらなければ、決して「もとはこちら」が分かった事にはならないという事です。

同じ話を百回だろうが千回だろうが、いつも新しい話として聞くだけの度量が、私達には求められています。

繰り返し、繰り返し、同じ話を何回も何回も聞くことによつて、ようやく分かってくるという事が多いのです。読書百篇、意自ずから通ず、と言うように、拝聴千篇、意自ずから通ず、です。

そしてまた疑問に思った事はそのままにしてしまわず、いつも自分にその疑問をぶつけ続けている事です。そうすれば時を経ていつかは、何らかの形で答えを得られる可能性があるので。

そしてなお、その答えに満足してしまわず、まだまだ、もつともつと、の思いで疑問を持ち続けることができるのであれば、やがてまた自分の成長の程度に応じた、より奥深い次の答えが得られる事になる筈です。

ですから、ただ単に言葉によつて説明された話を聞いて、分った様なつもり、文字を読んで、知った様なつもりになっているとすれば、それは大間違いです。

## 無知の自分を知る

「朝(あした)に道を知れば、夕べに死するも可なり」、即ち、大悟徹底すれば、いつ死んでもかまわないという思いで、時の経つのも場も忘れ、夢中で聞き続けたあの頃の平井先生の講義を、今また初心に帰り、白紙の心で初めからもう一度聞いてみたいと思うこの頃です。心を白紙に戻せば、平凡な日々の繰り返しのの中にも、思いがけない新たな発見があるはず。

私達は謙虚な白紙の心に戻り、「自分は本当に何も知らない」という状態になることが大切です。知らない自分

気付くことです。

私達は、「自分が知らない」ということを知らなければ、知る世界に至るための第一歩を、踏み出す事はできません。それは例えば、「下手<sup>へた</sup>」という事を知って初めて上手<sup>じょうず</sup>という事の意味が分かるのと同じ様なものです。「無知」ということの、その深い意味が心底分かれば、それは大悟に通じます。

どんな事でも、飽かず、たゆまず、繰り返し。

繰り返しその中に、今までは気付かなかった新たな発見があるのです。昨日よりは今日、今日よりは明日の自分を信じたいと思います。新たな一年、そして新たな一歩も、全ては繰り返しのの中から生まれます。

今年も色々な事を探りしながらの一年になろうかと思ひます。どうぞ変わらぬご支援を賜り、実りある年になりますように、そして末筆ながら皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げ、新年のご挨拶に代えさせていただきます。

平成二十一年 元旦



編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)

TEL 073・461・6300